

高杉友三君を憶ふ

寺師虎之助

力が有り過ぎては弱い衆生は壓倒されて眩暈がする。親鸞が大衆向きなのは愚禿なるが故であり、達磨大師に人気があるのはユーモアに富めるからだ。

偏にや凡人は凡人の偉大なる者にこそ引かる可し。人に長たる者が慾を制し愛と熱とな以て部下を導かば強情者も懦夫も喜々として、其の命に服する事必定にして己亦拔群の技量無しと雖も衆良く其の足らざるを補ひ大過な小に止め轉禍爲福の功得となさん。

古今東西を問はず、一人の力を以て大功を修めた例は一つも無い。

八紘一字の大理想達成に捷徑の手段がある。其は愛と熱との國家總動員を斷行し全高等官の心臓に動員マークをスタンプすればよい、嗟はさりながら人間一生60年に満たず、終日苦行する共自力では到底及び難き境域がある。

お互に引きつ引かれつ道を求めて切嗟啄磨する朋友の存在が望ましく、又我が心を常に擱でグングン此の境域迄導びき呉れる畏敬する人が欲しい。運よき事に吾輩にはS君と云ふ朋友があり、畏敬する四人の人々がある。高杉友三、河村幹雄、三浦承天、及品川義介である。

高杉友三君は長崎縣の産である、齡二五で花も咲かずに散てしまつた、明治36年生れで年こそは吾輩より一年下の弟分であるが後にも先にも心から兄事して居た唯一の畏敬の友である。

小兵であるが氣宇雄大悠々として迫らず、才氣煥發にして理想高く、義に富み熱血滾るが如くして、然も思慮ありて蒙動せず、意志強固にして挫折する事なし。籍すに尙20年の齡を以てせば、如何なる大事をも成し得たらむと惜まれてならぬ。

君と知己を得たのは七高で同席と爲たからだ。ボートを漕いだ關係で急に親しくなつたが、一年の時は平凡な男としか思はれなかつた。身體の割に頭が大きく肩を張てのそりのそりと歩いて居た。二年の一學期の成績は四〇人中三九番であつた。吾輩は心配して、彼を鞭撻した。彼は平然として曰く、「餘計な心配だ、二學期に一番なら落第はすまい」と、之からが見物であつた。殊更に勉強する様子

はなかつたが二學期は果然二番となり、彼の本性が現れ出した。

三年の冬彼はN君G君三人で無錢旅行をした事がある。大分縣の某驛は當時鐵道の末端であつたが彼等は深夜トホトボと此の驛に辿り着いた。錢の要らない一夜の宿が欲しいのである。

驛長室を覗くと誰も居ない、暖房の殘温で程よい暖さだ。三人は椅子を三つづゝ並べて横着にも驛長室に寢込てしまつた。

翌朝になつて驛長殿は自分の室が三人の無禮者に占領されてるのを發見して驚くと同時に怒心頭を發し、テーブルを叩いて怒號した。

M君とG君は喫驚仰天椅子から轉り落ちてへたばつてしまつた。驛長殿は尙も喚く。此の時彼は眼を擦りつつ、やおら起上り舉手の禮を以て驛長に對し悠然として唱て曰く「驛長驚く勿れ、時に無錢旅行者無きにしも非ず」と誠に踰蕩たり。驛長殿も苦勞人であつた。朝飯を振舞はれて喜び勇む三人を顧しさうに見送るのであつた。

彼は九大農學部農藝化學科に入學し吾輩は農學科であつたが一學期で中退して翌年工學

部に轉學した。

下宿は箱崎で近かつた。二人で色々な事をやつた。箱崎の海岸で遊げないくせに強情を張て危く土左衛門になる所を引張り上げた事がある。體力の鍛錬だと云ふので築港の工夫に備れて、モッコ擔をやつた。吾輩は三日間氣張たが、彼は十日間頑張つた。

肚を練るんだと言ふので大學通りの禪寺に參禪した。夏の暑い頃であつた。和尚が坐禪を組で呼吸を一千數えろと言つた。

本堂の大廣間の薄暗い中に只二人黙々として坐つて居たが蚊がたかつて所嫌わずチクチク刺しやがる。氣が散つて如何にもならぬ。彼が止めたら止めやうと横目で見るが身動一つしない。

歸る時もう止めたといふと、彼は平然たるもの「無我の境の探究は之からだ」と。吾輩は三晩で止めたが、彼は約一月通つた。

河村先生には心から私淑して居たが工學部に限られたる教友會には會員たる資格がない之ばかりは吾輩の得意であつた。手を更へ、品を換えて頼むが吾輩も取合はなかつた。五ヶ月も経つてからだ、冬の或る朝早く二日酔氣分の素張しい元氣で吾輩の室に飛び込んで來た。五月蠅い奴だと思つて寢た振りして居ると、カカリと窓を開けた。冷い風だ、外を眺めて獨言して居る。

「相當積たぞ……酔覺めて肌心地よき吹雪かな……おい、大望を抱く身が惰眠を貪て如何する。起る起る起んと殿るぞ」

誠に五月蠅い奴だ。「今頃何だ」と飛び起きると「いゝ話がある、まあ坐れ」。

彼の話は斯うだ。河村先生に入門するのに相當苦心した。昨晚やつと許が出て一月に一回づゝ單獨で行て仕事の手傳をする。其は雑誌「日本及日本人」の中から佳作の和歌を拾ひ纏める事である。彼は目的達成の嬉しさから中州のおでん屋を呑み歩て來たらしい。

河村先生は彼の素質を見込んだらしい、之から彼がゲンゲン向上し出した。

彼は農學部を牛耳つて居た。或る時擬國會を目

論み彼自ら議長になつて盛に氣焔を擧げて居た。

其の頃鐵道擬獄で新聞が賑て居た。學生課では擬獄の模擬芝居でもやるかと思つて慌てて會の中止を命じた。

彼は議長席にスツクと立上つて事務員を叱咤して曰く、「大正の聖代に於ては辨論は自由である、今を去る事拾數年民權思想幼稚なる頃九州帝國大學農學部に於て擬國會を催た時之が中止を命じた事ありと聴くが、時代は已に大正である官僚の獨斷を以て本議會に解散を命ずるとは何事ぞ議事進行は議長の権限にあり」と。

彼は吾輩より一年早く卒業して朝鮮の某農事試驗場に就職した。爾後杳として消息がない、風の便によれば彼は神經衰弱に罹り役所には無斷で或るお寺に寢て居るらしいとの事吾輩そんな事がと打消しつゝも心配であつた。明けて二月、飄然と福岡に舞戻て來た。元氣充満颯爽たる風情である。

一夕彼と肉鍋つゝいた。離の一室だ、彼の氣焔當る可らずだ談論風發將に數萬言。其の言ふ所次の如し。「朝鮮では感ずる所あつて約三月の間外金剛の神溪寺に參禪して居た。神經衰弱とは以ての外だ沈思默想百日の間、只管心の探究に餘念なかつた。念じ來り觀じ去れば屁の河童だ。百尺竿頭尙一尺進めば凡て之凡俗の境、花は紅、柳は綠だ。白隱は曰はずや「無相の相を相として行くも歸るも餘所ならず、無念の念を念として譚も舞も法の聲」と。無の一字に徹せずば此の心境は解るまじ、君は憐なり凡俗虎公よ。然れ共何ば凡俗なりとも心の尊さは解るぢやろう。天高して日月懸り地厚ふして山河横はれ共我此心一度凝るや能く日月を貫くべく、我此心遠く翔るや能く山河を包むべし、只六尺の肉身に限らるゝ我心に非ず、只五拾年の生涯に盡ぬべきに非ず。誠に心靈こそは至玄至妙なり。

然るに心に靈ありといへど磨かざれば日に昏む。たゞ六尺の肉身を天地に托すのみとはならむ。

我が親愛なる虎公よ、汝無理會の處あらば
我に倣て想を練り究め來り究め去る可し。光
陰は箭の如し、謹で雑用心する事勿れ。吾輩
神溪寺に參禪する事百ケ日、此の間に於て已
に一生報國のプログラムを造れり。我國土は
神代より豐蘆原と恵れ來たからには農を以て
立國の基本となすべきなり。然るに土地狭ふ
して人口密なり。今にして大陸開拓の國是を
定めざれば誠に由々敷大事とならん。

支那は又困れる國なり。今にして策を施さ
ざれば洋鬼の餌食となり印度に類せむ、我に
一策あり長城を境にして南北二分し、北半は
我屬領となして、大和民族を扶殖し、南半は
我盟邦として軍事政治經濟的に有無相補ふ一
環の繩とすべし。北を固め南を押へ亞細亞の
二大國手を握らば八紘一字の大理想の實現は
易々たりだ。我輩は此の事ある可きを期し農
村青年の訓育に畢生を捧げむと決せり。

茨木縣友部の國民高等學校こそは吾輩の念
願達成の搖籃なり。之を育てひろめて一縣一
校迄及ばさむ。君に若し日本男兒たるの熱あ
らば、吾輩に一臂の力を盡せ。君は北海道に
行くと聞く。何百里隔たる共二人の友情に變
りなし。孤獨を感じなば此の高杉を想念すべ
し。肚だ肚だ、一生修養と心得て怠るなど。
彼は説き來り其の盡るを知らず、吾輩は彼の
偉に打たれて只黙々たるのみだつた。やがて
彼は銚子を取て吾輩の盃に波々と注ぎ。

「おい元氣よく飲もうぢやないか」と自分も盃を
舉げた。吾輩は始めて夢が覺めたやうだ。

「すばらしい元氣だ將に焦遂に似たり」

「焦遂とは誰だ」

焦遂五斗方に卓然高談雄辯四筵を驚かすだ」

「何だ、杜甫の八仙歌か、然らば貴公は宗之に似
たり」と言ひつゝ微吟して曰く。

「宗之は瀟灑たる美少年觴を舉げて白眼にして青
天を望む。皎として玉樹の風前に臨むが如し」

「風前に臨むとは心許ない、だが今夜は君の説法
を聽て得る所があつた大いに頑張るぞ」

「ウンやろう、今晚の酒は旨かつた將に蘭陵の美

酒だ」

「玉椀盛り來る琥珀の光、但主人をして能く客を
醉はしめば」

「待て待て、今日の勘定は主客折半だぞ……知ら
ず何の處か是他郷」……と

此の事あつて旬日の後彼は大望を懷いて上京す
る事となつた、暗い晩だつた。

博多の驛で別れる時彼は言つた。

「君も僕も末子だ、親は老いとるぞ、少しは
功を急で安心させなくちやね」

發車の間極彼は突然朗朗と吟じた。

「誰か道ふ君王行路難しと、六龍西に幸して
萬人歡ぶ地は錦江を轉じて渭水をなし、天は
玉疊を廻らして長安を作す」

之が最後とは夢にも考えなかつた。

四月八日には吾輩も亦小望を懷いて札幌の
驛に立て居た。

五月十日別てからの第一信を入手した。

「當校は目下第一期生徒五十餘名、農村苦の轉禍
爲福を念とし、將來農村改造の中心人物と爲り、
邦家の爲め大飛躍をなさんとする熱血男兒のみ。
その眞劍なる勉強振りと猛烈な勞働振りには參觀
人誰でも敬服讃歎して歸る。つまり上に立つ校長
が至誠一貫農村問題解決を畢生の事業として一世
を率ゐる獻身報國の誠を盡さむといふ信念赤誠の權
化であるから、その下に集る諸生ことごとく一粒
みりの戰士である。農場は六千町歩廣々茫々たる
もので遙か筑波嶺を眺め乍ら鋤取る時、使命の重
大さを思ひ責任の深く飛躍の餘地大なるに想到し
武者振を感じる。先日は駐日丁抹及獨逸公使來校
し相互連絡提携を談合した……いづれ其のうち機
會を得て面談大いに快語せん」

彼からの便りは之が最後であつた。

五月末日急性肺炎で忽然として期待多かり
し一生を畢た。

已に拾數年彼の面影を一日だつて忘れた事
がない。頼山陽は齡四拾にして嚴父の杖なき
を歎いたと聽く、我は凡骨を抱いて彼の叱責
なきを歎く。(未完)